

紹介

沖森卓也、佐藤信、平沢竜介、矢嶋泉著

『歌経標式 注釈と研究』

佐藤 信 一

以前、文学散歩で平沢竜介先生とご一緒した時に、突然漢詩の平仄のことを聴かれ驚いたことがあった。その時に「歌経標式」の注釈という話を知った次第である。

同書は影印編・本文編・注釈編・索引編・研究編の五編、及び諸本解説・例歌一覧・参考歌一覧・参考文献・事項、書名、人名索引（注釈編）・あとがきよりなる。影印編には「歌経標式」真本系、及びそれを抄出した抄本系、それぞれの写本の紹介として、今まで影印刊行のなかった東京国立博物館本・宮内庁書陵部本が写真掲載され、本文編では真本系から竹柏園本、抄本系から書陵部本を翻刻し、他諸本との校異も示されている。注釈編では校訂本文を立て、訓読文によって奈良時代語の復元を試みられている。索引編は漢字索引・万葉仮名索引・仮名書き語彙索引・字音索引まで収めている。

研究編の方を見てみよう。平沢竜介先生の「歌字書としての『歌経標式』」では、漢詩の概念である詩病を無理に適用した歌

病自体が矛盾を孕んでいたことが指摘されている。さらに「万葉集」での分類基準と比較され、「万葉集」では歌の良否が批評基準であったのに対して、「歌経標式」では分類する基準としてしか機能していない、つまりそこでの批評意識の欠如が炙りだされている。因みに付表として掲げられている「歌病を犯したり、查体となつてゐる例歌一覧」は、「歌経標式」の撰歌の基準を考へる上でも有用。佐藤氏「藤原浜成とその時代」は「歌経標式」撰集の背景となる政治的緊張があつたことを指摘する。また作者浜成の立場は和歌の隆盛による政治的安定を希求する「文章経国」的立場とし、後年の浜成の仏教への傾倒を理解しようとする。矢嶋氏「歌経標式」の例歌」では、例歌を論証を保証する手立てと見た上で、それにもかかわらず理論に合致する歌が少ないことから、改変がありえたとする。沖森氏「言語資料としての『歌経標式』」は「歌経標式」が正音的な用字法を志向していることを明らかにした上で、音韻に関する考察から抄本の成立を十世紀後半以降と推定している。

以上無意味な要約に終始した感は否めないが、上代・中古の文学・言語を考へる上で、本書が不可欠なものになることは疑問の余地がない。「うた」というものの在り方を論ずる際に、必見の書となるであらう。

（平成五年五月二十五日刊 A5判 三九八ページ 桜楓社）